

# 琥珀い風

きらめきの地域デザイン

あおいかぜ

特集 ニューリズムへの誘い

64

2008 November

## 地域に根ざし、地域社会から世界に発信する

### 本田雄一

(島根大学学長)



密着し、地域の課題解決に貢献できる大学であるためには、大学の使命である教育、研究、社会貢献のすべての面で、地域に根ざした個性を明確にしなければならぬ。

島根県の地域個性としてまず挙げられるのは高齢化、中山間地、汽水域の三点である。島根大学はこの地域個性に

科学や産業、さらには医療といったさまざまな側面から総合的な研究を展開している。

さらに、淡水と海水が出合う汽水域は、川と海の生き物が息をするという特殊な環境であり、多くの生物が息をする場所として注目されている。その代表が宍道湖・中海である。そこでは汽水

大学の使命は、知の拠点として研究を続けるとともに、国際社会の発展と社会の進歩に貢献できる人材を養成することである。この使命を実現するために、島根大学は知と文化の拠点として培った伝統と精神を重視し、「地域に根ざし、地域社会から世界に発信する個性輝く大学」を目指している。地域に

立脚した研究や人材養成を着実に進めている。

二〇〇七(平成十九)年における島根県の高齢化率は全国で最も高い一八・二%である。まさに日本一の高齢化先進県であり、それに伴ってがんの発病率も高くなっている。そうした地域課題を解決するために、出雲市にある医学部では

域特有の珍しい生物も生息しており、学術的にも重要な場所である。この美しく貴重な汽水域を後世に残すことも島根大学の大きな課題である。そのために汽水域研究センターを設立し、自然と調和した汽水域の賢明な利用のあり方を研究している。

こうした研究プロジェクトを推進するとともに、島根大学はステークホルダー(利害関係者)である学生が主体的に学べる教育プログラムを展開している。例えば、教育開発センターは、学生の学びの質向上を目指して全学体制によるFD(ファカルティ・ディベロップメント)プログラムを展開している。ここでは、教職員と学生のコミュニケーションの場を提供することにより、教育力向上に向けて大学構成員全員が組織的に取り組んでいる。こうした取り組みにより、ある調査では島根大学の学生満足度は全国でもランキング上位に位置している。

また、全国の総合大学では初めて環境マネジメントシステム(国際規格ISO 14001準拠)を取得し、環境に配慮し、自発的に行動する環境マインドを幅広く取り組みが全学で行われている。島根大学は、地域課題に立脚した国際的水準の研究を推進するとともに、その課題解決に取り組む人材を育成することで、より地域貢献を推進していき



# 碧い風

きらめきの地域デザイン

あおいかぜ

## 64

2008 November

### contents

- 16 「地域に生きる企業家群像」64 関西化研工業株式会社 社長 重永つゆ子 《山口県周南市》
- 20 「産学官連携最前線」7 地域資源と独自の染色体工学技術等で生活習慣病の予防を促進 《鳥取県》
- 22 「キラリ輝く元気企業」37 ステンレスの強さと輝きを追求するケミカル山本 《広島市》
- 24 「シリーズ」21世紀をリードする企業団地 9 久米産業団地 《岡山県津山市》
- 25 「STOP! 地球温暖化」3 NPO法人「ハートナート」とり 《鳥取県米子市》
- 26 「夢紡人/ゆめつむぎびと」60 時計職人松浦敬一さん 《広島県呉市》
- 29 「佳味彩々」9 鯖の味噌漬 《岡山県》
- 30 「庭園逍遥」9 常栄寺雪舟庭 《山口県》
- 32 「工芸の旅」9 川尻筆 《広島県呉市》
- 4 観光の新潮流とニューツーリズム 古賀 学
- 7 教育グリーンツーリズム 《島根県美郷町》
- 8 温泉に自然と文化を織り交ぜたロングステイ旅行 《鳥取県米子市》
- 10 多島美とムーンロードで癒やしの旅を創出 《岡山県瀬戸内市》
- 12 神楽文化の発信で観光客を魅了 《広島県北広島町》
- 14 CSRを識る新しい産業観光 《山口県》

表紙写真:「エコツーリズムで注目されている山口県の秋芳洞」写真:渡辺久徳(山口県下関市在住)  
 目次写真提供:大山・中海・隠岐エコツーリズム協議会、NPO法人広島神楽芸術研究所、山口県  
 表紙デザイン:久原 大樹(広島市在住)

\*本誌は再生紙を使用しています。

### 特集 ニューツーリズムへの誘い

古賀 学

《島根県美郷町》

《鳥取県米子市》

《岡山県瀬戸内市》

《広島県北広島町》

《山口県》

《山口県周南市》

《鳥取県》

# 観光の新潮流とニューツーリズム

## 古賀 学

観光が旅行者と観光地の両面で大きく変化するなか、地域に密着した新しい観光としてニューツーリズムが注目されている。それを成長させるためには「観光の原点」を再認識し、維持することが必要である。



グリーンツーリズムを楽しむ人が増えている山口県の長門峡（写真：渡辺久徳）

### 需要と供給の両面で変化する観光

観光は大きく変化している。しかも、旅行者（需要）だけでなく、観光地（供給）においても変化が生じている。

旅行者という面では、名所旧跡をくると見て回るだけでなく、その地域の人々の生活と触れ合うことを強く求めるようになった。いわば、観光に対するニーズが質的に大きく変化してきたのである。また、行動システムも変化している。大型バスで観光名所を巡り、宿泊先では宴会やカラオケを楽しむといった団体旅行ではなく、知識の取得といった明確な目的を持ち、自由気ままに旅を楽しむという個人旅行へとシフトしているのだ。

一方、観光客を迎え入れる地域にも大きな変化が生まれている。まず一つは、観光は観光関連企業だけの事業という発想ではなく、地域の生活環境を踏まえた地域振興という視点から重視されるようになってきた。また、観光客を受け

地元の人たちが主体となった、しっかりと地についた企画が必要となる。

これまでの多くの旅行商品は出発地の旅行会社が企画する発地造成型旅行であった。多くは既存の情報や今までの旅行商品をベースにした、都会のオフィスで企画された旅行商品だ。しかし、それでは地域に密着した旅行は実現できない。もともと地域の人と触れ合う、地域を楽しむためには地域ならではのアイテムが必要であり、それを企画できるのはその地域でしかないのだ。その意味で、現在全国的に進められている着地型旅行はニューツーリズムに大きな可能性をもたらしている。

### 原点をきちんと維持することが必要

しかし、ニューツーリズムにも大きな課題がある。まず、ニューツーリズムの「原点」をきちんと維持することである。

ニューツーリズムは決して、「白紙」から生まれてきたわけではない。エトワリズムであれば自然を守っていくという土地元の活動があるし、ファミリーリズムなら各家庭で花を植えることで街に潤いをもたらしたい、グリーンツーリズムでは体験を通じて農業を振興したい、消費者に農業の大切さを認識してもらいたいというバックボーンがある。これを失わずに

入れることで飲食店なども含めた地域のサービス産業全体を成長させるといった観光産業という視点から観光振興を図るといふ動きも顕在化している。

### 観光ニーズの原点は「癒やし」

現代人が観光に求めるニーズは何かと問われると、まず挙がってくるのが「癒やし」という言葉である。全国の観光地域づくりにおいては、癒やしをキーワードに掲げ、訪れる人々に心と身体の間から提供しようという、さまざまな対応が図られている。

例えば、団体宴会泊型の温泉地においても、温泉資源の根本的な見直し、トッキングやまち歩きなどの推進、さらには医療機関とのタイアップなどが徐々に増加している。こうしたメニューを通じて、宿泊客の心と身体をリフレッシュしようとしているのだ。

では、観光における「癒やし」とは何だろうか。それは「変化」であるといえる。

観光の基本的欲求を考えると、挙

げられるのは、自分の住む環境と対する環境を求める「対比的欲求」である。都会に住む人は農山漁村へ、管理社会の中で働く人は陶芸などの自由な創作活動へ、時間に縛られて生活している人は自由な時間を求めて、それぞれ旅に出る。そうすることで、人々は「変化」を得ているのだ。

### 観光に大切な「変化」

観光が人々にもたらす大切な効果の一つは、「この「変化」であろう。場を変えても時間の流れを変えることにより、一時的であっても束縛された現実を忘れることができるのだ。例えば、北海道では花で愛媛県双海町では夕日で観光振興を行っている。庭先に咲く花、毎日どこからでも見ることが出来る夕日を求めて、人々はわざわざ訪れる。

これらは観光ニーズの多様化を示している例といえようが、実は旅の目的は何でも良い。人は、自分に変化を与えてくれる「きっかけ」を探しているのだ。花屋の商品としか思っていなかった花が地

域の人たちによって大切に育てられている風景に新鮮さを感じ、いつもはバックに包まれた刺身が目の前で調理されることを喜び、収穫されたばかりの大根をお土産に「また来んさいや」と声をかけてくれた民宿のお母さんにホスレタリティを感じる。人は観光にそんな変化を望んでいるのだ。

### 地域や地元の人々が主体の旅行

こうしたニーズに応え、多くの人たちに「変化」を提供する旅行として注目されているのがニューツーリズムである。ニューツーリズムはいまや一般的な言葉になっているが、具体的にはグリーンツーリズムやエトワリズム、ヘルスツーリズム、産業観光、文化観光などを指すことが多い。

ニューツーリズムは、非常に幅広い領域を対象としているが、明確な目的を持って地域に滞在しながら、地域との深い「交流」を実現できることが大きな特徴である。そのためには、これまでのような旅行会社の企画では物足りず、地域や

書いていくことが大切な課題だ。観光客が増えるからグリーンツーリズムに取り組みとした「主客転倒の発想」ではコースリズムを持続的に成長させることはできない。

また、できるだけ旅行者一人ひとりと会話をすることも大切な課題である。私は、旅の充実度は地域の人たちとの会話の時間の長さに比例するのではないかと考えている。大型バスで名所旧跡を回る旅では地元の人たちと会話を交わす機会はほとんどない。その点、地域に密着したコースリズムは会話の機会を多くつくれることができる。

ある高校生たちの修学旅行のアンケート



波が穏やかな瀬戸内海で人気のシーカヤック（写真提供：岡山県瀬戸内市）

ト調査では、一番楽しかったのはトラックターの運転だった。もちろん、自動車免許など持っていないから大きなトラックターの運転は興味深いこともあるが、それ以上に農家の人から指導を受けながらたづなり会話を交わしたことが大きな感動として残ったのである。ただし、ここで肝心なことは、仕掛けすぎた会話ではなく、自然と生まれてくる会話を大切にすることだ。

### 地域の生活をリアルに感じる観光

テレビ番組に「田舎に泊まるっ」がある。タレントがこれといった観光名所も宿泊施設もない農山漁村に行つて、自分で宿泊先を探し、その家の人たちと交流するものだ。別れの日には自分の得意とすることで恩返しをする。演出など感じさせない自然の生活を描きながら、なぜかしら別れは涙を誘う。この番組は若い人たちも含めて人気を博しているが、それ以上に「観光の魅力」について多くのことを教えてくれる。

一つめは目的のない観光であること、二つめは旅館や民宿といった宿泊施設ではない民家に泊めてもらうこと、三つめはただで泊めてもらうこと、四つめは終始日常的な会話がなされていること、そして五つめは泊めてくれたことへの感謝である。

これは昔の霊場めぐりに近いものであり、そこには観光の「原点」がある。現代のコースリズムが求めるものはここにあってはならないだろうか。

観光は一般的に「非日常の活動」といわれてきた。確かに、日常にない自然や街並み、日本一のモノを求めて日常を離れてきた。その点では非日常といえるかもしれないが、それだけでは観光の本質を表すことはできない。

観光を非日常的なもの、異質なものとしてとらえることで、何かを見落としはしないだろうか。

むしろ、地域の生活をリアルに感じるからこそ、観光に求められている変化であり、体験であるといえよう。その点においても、地域にこだわり続けるコースリズムは大きな可能性に満ちているといえる。



滞在先の家族との食事もニューツーリズムの楽しみ（写真提供：島根県美郷町）

## 特集 ニューツーリズムへの誘い

# 教育グリーンツーリズム

《島根県美郷町》

## グリーンツーリズムで地域活性化

真夏の太陽の光が降り注ぐ八月七日の午前十一時過ぎ、広島県と島根県をつなぐJR三江線の宇都井駅に三十一名の高校生が降り立った。宇都井駅は地上三十メートルの高架橋の途中にホームがある珍しい駅で、引率の先生の説明を聞くと、生徒たちは思わず下をのぞき込んだ。生徒たちは広島県庄原市の県立庄原実業高校環境工学科の一年生で、ここから島根県美郷町での一泊二日の教育グリーンツーリズムが始まった。

美郷町は中国山地に抱かれた人口約六千人の町で、「中国太郎」の異名を持つ江の川が町中を貫いている。多くの中山間地がそうであるように、美郷町でも過疎化や少子高齢化、農業・林業の担い手不足など集落機能を維持するための課題が山積みになっている。そうしたなかで地域経営の一つの柱として推進しているのが、豊かな自然や文化などを活用したグリーンツーリズムだ。

その一環として数年前から高校生たちを対象とした教育グリーンツーリズムを展開しており、庄原実業高校は四回目の受け入れとなる。

## 生徒たちを受け入れる地元住民

高架駅を降り立った生徒たちは自転車に乗り換え、江の川沿いを美郷町大和事務所向かった。その間、先導する美郷町の田舎暮らしコーディネーターがポイントごとに川の姿や地形、さらには町民の生活などを説明していた。その姿からは、山々に囲まれ大きな川が流れる田舎の風景を単に眺めるのではなく、田舎の生活や文化、さらには川を通じた都市とのつながりなどを少しでも理解してもらおうという思いが伝わってくる。



江の川沿いを自転車で走る高校生たち

大和事務所でオリエンテーションが終わると、伝統的な漁法である投網と川舟の体験だ。地元の人々の指導を生徒たちは真剣な表情で受けていたが、川で実際に体験するととなると、なかなか思うようにはならない。それでも、生徒たちの表情は満足気だった。

その後、生徒たちは十班に分かれ、民泊先に向かった。民泊を受け入れているのは地元住民で構成される美郷町田舎丸ごと体験推進協議会である。「会員数は現在二十一名ですが、活動を通じて美郷町の魅力を満喫してくれればうれしです」と、協議会の西嶋一朗会長は語ってくれた。

## 農業・農村の深い理解を得る

この教育グリーンツーリズムの大きな特色は、授業科目「農業実践研究」の一つ

の目的である農村の実態調査・研究も兼ねていることだ。農業・農村の多面的機能や役割を理解し、自然のすばらしさを体験するとともに、中山間地が抱える課題を発見し、それらの解決に必要な能力を育成することもこのツーリズムの目的となっているのだ。

「したがって、民泊先では、地元の伝統芸能である神楽を体験するとともに、仕事や昔の生活ぶりなどの聞き取り調査も行っています」と、企画課主任推進室の田中昭典室長は説明してくれた。

さらに、翌日は朝六時に起床し、朝食前に草取りやネギの収穫、イノシシの捕獲檻の見回りなどを行い、朝食後も除草やトマトの出荷、竹林の伐採などに汗を流した。「お客様」ではなく、その家族の一員として作業することで交流を深めるとともに、農村の生活を深く理解してもらおうという狙いからだ。

全国的に「田舎体験」は大きなブームとなっているが、そこには都市化で失ってしまったものへのノスタルジーという要因が強く働いている。しかし、都市と農村の真の交流を深めていくためには、ノスタルジーだけでなく農業・農村の機能と役割を理解してもらおうグリーンツーリズムこそ求められる。その意味でも、美郷町の取り組みはこれからのグリーンツーリズムのあり方を示唆しているようだ。

## ニューツーリズムの種類例

出典：『観光立国推進基本計画』（2007年6月閣議決定）

産業観光	歴史的・文化的価値のある工場等やその遺構、機械器具、最先端の技術を備えた工場等を対象とした観光
エコツーリズム	自然環境や歴史、文化を対象とし、それらを損なうことなく、体験し学ぶ観光
グリーンツーリズム	農山漁村地域において自然、文化、人々との交流を楽しむ滞在型の余暇活動
ヘルスツーリズム	自然豊かな地域を訪れ、そこにある自然、温泉や身体に優しい料理を味わい、心身ともに癒やされ、健康を回復・増進・保持する観光
ロングステイ（長期滞在型観光）	国内旅行需要拡大や地域の活性化の起爆剤として期待されるものであり、旅行者にとっては地域とのより深い交流により豊かな生活を実現する。
文化観光	日本の歴史、伝統といった文化的な要素に対する知的欲求を満たすことを目的とした観光

### profile

#### 古賀 学 こがまなぶ

1949年福岡県生まれ。松蔭大学教授・付属観光文化研究センター委員、東京大学まちづくり大学院・東京農業大学非常勤講師等。大学を卒業後、社団法人日本観光協会に入協し、一貫して観光地関連計画調査事業に従事する。その間、日本観光協会総合研究所長、自動車旅行推進機構幹事・事務局長（現在顧問）などを務める。2008年より現職。主な共著に『現代交通観光辞典』、『観光カリスマ』、『観光実務ハンドブック』などがある。

# 温泉に自然と文化を織り交ぜた ロングステイ旅行

《鳥取県米子市》

海の温泉地・皆生温泉では、泉質の効用を生かしたヘルスツーリズムを新たに生み出すとともに、  
大山の自然や城下町の文化などを組み合わせながら長期滞在型の旅行商品を開発している。

## ニューツーリズムの 組み合わせで長期滞在

「海に湯がわく」ともいわれる鳥取県米子市の皆生温泉は、弓ヶ浜半島の東端にある山陰有数の温泉地である。東南に秀峰大山、北に美保関、そして目前に

日本海が広がる景勝は高く評価され、「日本の朝日百選」、「日本の渚百選」、「日本の白砂青松百選」、「都市景観百選」にも選ばれている。

この皆生温泉と周辺地域を舞台に、「エツーリズムやヘルスツーリズム、さらには文化観光といったエツーリズムを組

み合わせることで長期滞在型の観光を実現しようという動きが活発化している。その中心となって旅行の企画提案などを展開しているのが大山・中海・隠岐エツーリズム協議会だ。協議会は二〇〇七（平成十九）年度に設立された組織で、島根県の隠岐を含めた八市町村の行政や観光協会、NPO、皆生温泉旅館組合、個人などで構成されている。

「大山をシンボルとしたエリアでエツーリズムを推進しよう」という組織ですが、NPOや、私のように個人として参加している人もおり、ゆるやかな組織となっています。その分、しなやかで、独創的な活動もできます」

こう語るのは、皆生温泉旅館組合の戦略アドバイザーで、協議会のメンバーとして旅行商品の企画提案などを手がけている細田裕さんだ。

エツーの三つの舞台が用意されている。

オーシャンステージには、皆生レクリエーションカヌー協会が主催するシーカヤックの体験コース「海上散歩カヤック」、皆生ライフセービングクラブのメンバーが温泉街や浜辺のコース（約四キロメートル）を案内する「皆生ビーチウォーク」がある。

一方、グリーンステージでは、西日本最大規模を誇る大山のブナの森のドライブと修行僧が歩いた古道の散策をセットにした「ブナの森ドライブ&古道散策」、刻々と変わる大山の姿を楽しむ「感動のドライブハイパーデイツアー」、豊かな動植物の生態系が保たれている大山の自然林をネイチャーガイドが案内する「大山・ブナの森の古道散策」がある。

さらに、パークステージには「寺町座禅体験ツアー」と「米子の下町、お地藏さん巡りツアー」が用意されている。米子市の寺町は全国でも珍しく九つのお寺が一列に並んでおり、座禅ツアーはここで禅僧の修行法として古くから伝えられてきた座禅を体験するものだ。

一方、米子市では古くから数多く鎮座するお地藏さんにお札を貼って亡くなった人を供養する風習があるが、お地藏さん巡りはお地藏さんの由来を聞き、願掛けをしながら米子城界隈を散策するものだ。

## 3%美しくなる スリミングステイ

協議会が設立された背景には皆生温泉の宿泊者数の減少があった。観光の主流が団体旅行から個人旅行へとシフトするなかで、団体旅行をメインとしてきた全国のほとんどの温泉地では宿泊者数が減少している。

そうしたなかで皆生温泉は早くから地域の魅力をプラスすることで長く滞在してもらう商品開発に取り組んできた。そこで生まれたのが、ヘルスツーリズムとエツーリズムを組み合わせた二泊三日の「スリミングステイプログラム」で、キャッチコピーは「3%美しくなる旅」だ。この「3%」は「オーツァー」で得られた数値である。

スリミングステイプログラムは、海岸散策とビーチレシビ、脂肪燃焼入浴という三つの基本プログラムで構成されている。

海岸散策は、朝食の後などに海と砂浜と松林が織りなす美しい海岸をゆっくり散策するものだ。ビーチレシビは独自に考案された新しい会席料理で、従来に比べてカロリーを抑えるとともに、豊かな地元食材を使っている。産地ならではの旬の二品を統一食材としているが、その他は各旅館のオリジナルとなっている。

## 周辺観光施設とも連携して 魅力アップ

「このうち古道散策とシーカヤックは特に好評ですし、座禅体験ではわざわざ東京からいらして座禅をし、住職さんとじっくり話すことができましたというお客様もいらっしゃいます。そうした点でも観光の流れが変わってきていることを強く感じます」と、細田さん。

協議会では、さらにエツーのガイドなどを養成して内容の充実に努めるとともに、境港市の水木しげるロードやフラワerparkととり花回廊、足立美術館といった周辺観光施設との連携も深め、ロングステイの魅力を高める考えだ。

海岸の温泉地から生まれたヘルスツーリズムは、豊かな自然をバックとしたエツーリズムなどと融合し、新しい観光の可能性を秘めながら、ロングステイ型観光への道を着実に歩んでいる。



大山を背に日本海を望む皆生温泉

お客様はいつでも効果をチェックできるようになっている。

## 自然や文化で高付加価値化

こうした基本プログラムに加えて日中やチックアウト後にプラスできるのがオアシナルツアーで、絶好のロケーションを生かしたオーシャンステージ、大山の自然や文化などを楽しむグリーンステージ、地元の伝統的な文化を楽しむパワース

人気を集めている大山の古道散策コース



人気を集めている大山の古道散策コース

# 多島美とムーンロードで癒やしの旅を創出

《岡山県瀬戸内市》

朝日と夕日がそれぞれ全国百選に認定されている瀬戸内市では、美しい瀬戸内海の自然とスポーツ、伝統文化などを組み合わせながら、多彩な「ニューツーリズム」の創出に取り組んでいる。

## 「百選」に認定された朝日と夕日

「色彩の魔術師」といわれ、瀬戸内海の光と色彩に満ちた叙情的な風景を撮り続けた写真作家の緑川洋一氏（故人）が生まれたのは岡山県瀬戸内市邑久町（むしあけ）。この由明（ゆあけ）から見る朝日は「迫門の曙」といわれ、和歌にも数多く詠まれている。

由明がある瀬戸内市は市名が示すように瀬戸内海に面しており、多島美の美しい地域として知られている。そのためNPO法人日本列島夕陽と朝日の郷づくり協会が選ぶ「日本の朝日百選」では由明が、同じく「日本の夕陽百選」では牛窓（うしまど）が選ばれている。牛窓は古くからの港町で、朝鮮通信使にまつわる本蓮

寺やゆかりの井戸などが当時の面影を残している。また、牛窓から見る瀬戸内海の眺望が素晴らしいことから、「日本のエーゲ海」ともいわれている。

朝日百選に選ばれたのは由明が県内初で、朝日と夕日の両方で認定されているのは全国でも三か所、中四国では瀬戸内市だけである。

この朝日と夕日を楽しみながら、ゆっくりとした時間を過ごすことで心と体を癒やしてもらおうと、瀬戸内市はヘルスツーリズムを中心とした「ニューツーリズム」に本格的に取り組んでいる。

## ニューツーリズム創出で観光振興

一九八七（昭和六十二）年に制定された総合保養地域整備法（リゾート法）を

てくれた。

こうした観点から創出されたのがグリーン・ブルツーリズムや文化観光、ヘルスツーリズムなどで、特にヘルスツーリズムの取り組みは二〇〇七（平成十九）年度の国土交通省の「ニューツーリズム創出・流通促進事業」にも採択された。

グリーン・ブルツーリズムにはみかん狩りや地引き網、カキ打ち体験などがあり、カキ打ち体験は、全国有数の力キの産地である瀬戸内市の漁師と触れ合いながらカキをむくものだ。一方、文化観光の素材には日本刀の製作工程を見学できる備前おさふね刀剣の里や、

朝鮮通信使の資料を展示している牛窓海遊文化館、江戸時代から昭和三十年頃までの懐かしい面影を残す「しおまち唐琴通り」などがある。

## 「癒やし」をテーマとしたヘルスツーリズム

こうしたニューツーリズムで特に注目されるのは「癒やし」をテーマとしたヘルスツーリズムである。ストレスが多い現代社会において、癒やしは観光の大きなニーズになっている。その癒やしを提供することで滞在型観光を振興しようというのが瀬戸内市のヘルスツーリズムだ。

ヘルスツーリズムには、牛窓ムーンロードや牛窓の夕日、由明の朝日鑑賞と前島トレッキングなどがあり、最近ではノルディックフィットネスウオークも人気がある。波が穏やかな牛窓では月の光が海面に反射するため、月に向かって真っすぐな光の道が出来る。これがムーンロードで、牛窓では鹿歩山など三か所がお勧めのポイントとなっている。

このヘルスツーリズムでは、夜は感動的なムーンロードを眺めながら、「心の洗濯」をしてもらうとともに、日中はノルディックフィットネスウオークや前島トレッキングなどを楽しめるようになっている。ノルディックフィットネスウオークはフィンランドで生まれたスポーツで、クロスカン

トリースキーの選手たちが強化トレーニングとして行っているスキーウオークを、ポールを使った簡単な歩行運動にしたもので、効果的な有酸素運動として注目されている。

一方、牛窓の沖合に浮かぶ前島は、「緑島」とも呼ばれるほど緑が豊かな島で、野外活動の拠点となる研修センター「カリヨンハウス」もある。前島トレッキングはこの島をトレッキングして大自然を体感するものだ。これ以外にも牛窓では、一〜二人乗りのシーカヤック、ペタラン船長が舵をとるヨットセーリングなども楽しめるようになっている。

## 小粒でも楽しさを満喫できる観光

「瀬戸内市には全国的に注目されるような大きな観光施設はありませんが、小粒ながら楽しさを満喫できる観光素材には恵まれています。そうした素材の魅力を生かして観光の付加価値を高めていきたいと考えており、その意味でもヘルスツーリズムをはじめとしたニューツーリズムには本格的に取り組みたいと思います」と、小杉主任は語る。

写真作家緑川洋一氏が愛した瀬戸内海は、その美しさで多くの人たちに癒やしを提供するとともに、新しい観光の可能性を示しているようだ。



月に向かって真っすぐな光の道ができるムーンロード



緑豊かな前島でのトレッキング



訪れる人の心と身体を癒やす由明の朝日

# 神楽文化の発信で観光客を魅了

《広島県北広島町》

神楽ブームを巻き起こした広島県の芸北神楽は、神楽文化をはぐくもつという住民の熱意と一体化し、神楽の魅力を世界に発信しながら新しい文化観光を創出している。



舞台狭しと踊る芸北神楽

## 若者の間で広がる神楽ブーム

豪華な衣装に身を包み、舞台狭しと踊る広島神楽は、いまや公演を追いかける熱狂的なファンがいるほどの人気である。最近では広島県の観光キャンペーンの目玉としても注目されている。神楽は招魂・鎮魂の神祭りに奉じられる芸能のことで、神々を招いて健康や豊穰などを祈願し、清めや被いなどの祭祀を行うものだ。

広島県は「神楽どころ」ともいわれるように数多くの神楽団があり、氏神様への奉納だけでなく競演大会やイベントなどでも神楽が上演されている。広島県の神楽はその形態から芸北神楽、備後神楽などに大別されるが、神楽団の多くは芸北地方を拠点とし、しかも人気が高いことから広島神楽といえは芸北神楽のことだと思っている人が多い。

芸北神楽は、隣接する島根県石見地域に伝わる石見神楽をもとに県北西部に伝わった。そして、現在の北広島町、安芸高田市、安芸太田町を中心に発展し、時代とともに変化しながら現在ま

を深め、神楽の将来を探る場となっている。広島神楽芸術研究所は実行委員会の全体管理を担当している。

『「月一の舞い」の模様は神楽の杜でも配信していますが、これをきっかけにして、子ども神楽も含めて地域間交流や後進の育成につながればうれしいですね』と、増田事務局長。

この「月一の舞い」は、地域間交流を進めるだけでなく、観光面でも大きな力となっている。「月一の舞い」の上演に併せて、地元のホテル会社である「たび」と「ホープバス協同組合」は「石見・芸北神楽『月一の舞い』観劇ツアー」を企画している。これは、朝に広島駅を出発し、北広島町の戦国の歴史館（吉川元春館跡）を回り、「月一の舞い」を観劇した後、温泉を楽しんで広島駅に夕方到着するものだ。「このツアーも旅行会社と広島神楽芸術研究所の連携で生まれたものである。」

## 神楽文化で人を魅了する文化観光

ツアー以外にもインターネットで観劇を予約する人も増えており、多い日は百枚以上売れています。しかも、地元の人たちだけでなく、町外の人たちの予約が多いです」と、増田さんはうれしそうに語った。

で伝承されている。特に、一九九一（平成三）年に北広島町内の神楽団が、それまでの神楽により物語性を持たせるとともに、舞台演出と融合させた新しい神楽を生み出した。これが神楽ブームの火付け役となり、神楽は若い人々を中心に気に広がっていった。

## ポータルサイトで情報発信「神楽の杜」で情報発信

こうした神楽ブームのなかで、神楽をより多くの人たちに楽しんでもらう機会を提供するとともに、神楽文化そのものを深めることで神楽の魅力を高め、神楽文化を新しい観光にはぐくんでいくという団体がある。北広島町のNPO法人広島神楽芸術研究所だ。

広島神楽芸術研究所は、中国山地に伝わる神楽を研究し続けている大学教授や地域文化を大切にしようという住民、地元的神楽団などで設立され、二〇〇四（平成十六）年にはNPO法人として認証された。

「神楽団が多いといっても、それぞれがバラバラに活動していたため神楽団を集約する組織はありませんでした。そこで取り組んだのがネットワークづくりと情報の一元化です」。こう語るのは広島神楽芸術研究所の増田恵二事務局長である。そこで、マイクロソフト株式会社が実

広島神楽芸術研究所は、これからもポータルサイトを通じて神楽の動画配信や上演日程の情報などを提供し続ける計画である。それとともに、会員となっている大学教授などを中心に神楽文化の研究を進め、神楽の魅力をさらに深めていく計画だ。増田さんたちは、それがあつてこそ本当の意味で人を魅了する「文化観光」が実現できると考えている。中国山地ではぐくまれた芸北神楽は、伝統芸能という枠にとらわれず、中国地域の新しい文化観光資源として、全国の人々を楽しませようとしている。

施する社会貢献プログラムを活用して、二〇〇五（平成十七）年には神楽のポータルサイト「神楽の杜」を日本語と英語で開設するとともに、広島県安芸・芸北地域の神楽団と島根県石見地域の神楽社中の活動調査などを行った。

このポータルサイトでは、三百以上の神楽団・社中の紹介、公演のスケジュール、神楽の動画配信などを行っており、



神楽の文化を研究する活動も観光には欠かせない。

多い日には一日千件以上のアクセスがある。

## 定期的な神楽上演で観光振興

広島神楽芸術研究所は、ポータルサイトでの情報発信だけでなく、神楽をじかに見たいという人たちのニーズに応えるために、定期的に神楽上演会を開催し、芸北地域の新しい観光に育てようとしている。それが「月一の舞い」というイベントだ。

これは、広島県の神楽団と島根県の神楽社中、北広島町神楽を活かした町づくり研究会などが一緒になって結成した広島・島根交流神楽実行委員会が毎月一回、北広島町の千代田開発センターで開催しているもので、これまで疎遠だった広島県と島根県の神楽団・社中が交流



神楽団のメンバーを撮影する観光客も多い。

# CSRを識る新しい産業観光

《山口県》

地域資源を生かし、日本の近代化に大きく貢献してきた企業の社会的・歴史的活動を学びながら、その精神を未来に受け継ぐというCSRツーリズムは、新しい着地型旅行として全国から注目されている。

## 企業の社会的責任を学ぶツアー

「明治維新・胎動の地」ともいわれる山口県は、伊藤博文や山県有朋など近代日本を築いた多くの人材を輩出してきた。

それとともに、セメントや石灰、大理石など近代化に大きく貢献する産業の礎を築いた人材も多い。

こうした人たちは、地域のため、国のため、そして人のためにと、さまざまな事業を興し、都市基盤の整備や生活の

質の向上に貢献した。地元の人たちは彼らを敬愛の念を込めて「翁」と呼んでいる。

しかし、都市基盤の整備や生活の質の向上は企業の経営者である翁らの高志だけではない。そこには



巨大な機械工場もツアーのルートに入っている。

石炭や粘土、石灰石などの豊かな地域資源はもちろんで、彼らの精神を受け継ぐ企業や従業員、そしてその活動を支える市民の存在も不可欠である。そうした企業や市民が山口県内、殊に宇部市、美祿市、山陽小野田市周辺には数多く存在している。

光」が展開されている。それが、宇部・美祿・山陽小野田産業観光推進協議会が企画する「CSRツーリズム」だ。CSRとは「コポレート・ソーシャル・レスポンスビリティ」の略で、企業の社会的責任を意味し、企業の利益と社会の利益を両立させようという考えだ。世の中が持続可能な社会の創造を希求し始めた今だからこそ、この地域が歩んできた共生の歴史を知ってもらうことに意義があると考えてのことだ。

### 起点は着地型旅行の創出

「CSRツーリズム創出の起点となったのは着地型旅行の推進です。県では平成十七年度から『やまぐち観光交流塾』という人材育成事業を行ってきましたが、十九年度からは地域自らがマーケティングの視点を持って地域資源の掘り起こしと再評価をし、ストーリーにのっとりた行程とガイドを組み込んだ旅行商品を創出する『着地型二十シジェント』の養成を行っています。宇部地域での取り組みはその一環です」と、山口県観光交流課の吉井明生主任はCSRツーリズム創出の経緯を説明する。

観光の多様化に伴って地域に密着した着地型旅行が求められるなかで、旅行商品を造成し、それを市場に投入する実践的な組織（機能）を各地に配置し

ようと考えたのである。そこで生まれてきた代表的な取り組みが、生活文化をテーマとした「岩国地旅の会」、グリーンツーリズムをテーマとした「心の都須磨の会」、エコツーリズムをテーマとした「秋吉台地域エコツーリズム協会」、そして産業観光をテーマとした「宇部・美祿・山陽小野田産業観光推進協議会」である。

## 「二十四種類の物語」を旅行商品化

CSRツアーの大きな特色は、ユニークなルート設定と産業観光エスコーターの存在である。ルート設定ではまず、炭鉱町の変化や産業の首みを学ぶ「石灰産業の命脈を辿る」や、塩をルーツとする化学工業の歴史と現状を学ぶ「塩変じて薬となる」、大理石の利用方法や匠の技などを学ぶ「大理石文化の息づくまちは」など十三のテーマを設定している。そし

て、そのテーマをさらに細分化し「二十四種類の物語」として商品造成している。

例えば、「石灰産業の命脈を辿る」というテーマでは宇部の海底炭田編と美祿の無煙炭編の二ルートがある。このうち宇部の海底炭田編は、エネルギー革命を乗り越えて発展し続ける宇部の歴史を学ぶとともに、国内最大級の貯炭場や炭坑から派生した巨大な産業機械工場を見学したり、石灰を使ったアクセスラーツクリなどを行うものだ。貸切バスに乗り込んで、新幹線も停車する厚狭駅を出発し、山口宇部空港を経由してから石灰記念館や巨大トレーラーの基地などを巡る日帰りコースで、料金は五千九百八十円（昼食付き）となっている。

「CSRツアーはすべて厚狭駅と山口宇部空港を経由していますので、他の商品で山口を旅行される人でもオプションル



現代のものづくりに継承されている技術を学べるのも大きな魅力である。

ツアーとして組み入れることが比較的容易です」と、吉井主任。山口での過し方に選択肢を増やすことにもつながっている。

## 物語の世界に誘う 産業観光エスコーター

一方、学びの効果を高めるための仕掛けとして、企業のOBや郷土史家などで編成する産業観光エスコーターが、ツアーの最初から最後まで同行し、実体験や文献資料などに基づく豊富な話題で観光客を物語の世界に誘う。観光客一人ひとりにガイドブックが行き届くように、各コースとも十二名から二十名の少人数でツアーを進行し、声の聞きにくい場所ではイヤホン付きトランスミッターを使うなどの心配りもなされている。さらに、ツアーの事前学習をしてもらうために特製



地元産の大理石の加工も見学できる。



セメント用の樽をモチーフにした最中（もなか）の工場



# 楽しく働ける職場こそ会社の命です

関西化研工業株式会社 社長 重永つゆ子 《山口県周南市》

## 壁に掲げられた 「感性を磨く十力条」

案内された社長室の壁に額縁が掛けられていた。「素直な心を持つ」、「机上で考えずとにかく現場へ行く」、「インスピレーションを大切にする」といった十訓が「感性を磨く十力条」として書かれている。それもすべて手書き文字だ。

社長室の壁というと、社訓や表彰状などとともに、こうした訓話や掲げられることが多い。それも日本を代表する経営者たちの訓話がほとんどだ。それらは身を削るような経験から得た貴重な理念であり、だからこそ多くの企業家の精神的な支えとなっているのだと思う。

では、この「感性を磨く十力条」は誰の訓話なのだろうか。失礼とは思いますが、あえてそのことを企業家に尋ねた。すると、「お恥ずかしい話ですが、誰の訓話なのか分からないのです。ただ、十数年前、小さな紙切れに書かれていたこの言葉を目にした時、私にはとても大切なものになりました。だからこそ、今でもこうして額に納めて毎日自分に言い聞かせるとともに、社員にも浸透させています」という言葉が返ってきた。

山口県周南市にある関西化研工業株式会社の重永つゆ子社長である。

## 先駆的に自動車の 時代に飛び込む

広島県東広島市に生まれた重永社長は、高校を卒業すると広島市の会社に就職し、そこで重永精亮氏（故人）と出会った。当時の精亮氏は「ドクター」に勤めていたが、高校を卒業した時から自分で創業することを目指し、営業や経理の経験を重ねてきた。

交際を続けるなかで一人は結婚の意思を固めた。一般的な結婚適齢期にはまだ若い年齢であったが、重永社長の両親は自分の考えをしっかりと持っていた精亮氏を強く信頼し、「この人なら絶対大丈夫だ」と、一人娘である重永社長を嫁がせた。

結婚する一年前、精亮氏は「ドクター」を退職し、関西化学研究所を創業した。創業を目指していた時、精亮氏はある大学の教授から「これからモータリゼーションの時代が来る。だから自動車関連の製品は成長する」というアドバイスを得た。自動車が普及すれば、それだけエンジンオイルなどの化学工業製品の需要も高くなる。そう考えた精亮氏は関西化学研究所を設立して、工業化学製品と自動車関連製品の製造販売を開始したのだ。一九六六（昭和四十一年）のことだった。研究所名に「関西」と付したのは、関西まで市場を開拓した

ということ思いからだった。

当時は、自動車の価格が月収の三十倍以上もする時代で、庶民には高根の花であった。しかし、精亮氏は「いつかは米国のように自動車を楽しむ時代が来る」と信じ、製品の研究開発に取り組むとともに、ドライブをもっと安全・快適にできる製品を一つひとつ世に出していた。

## 体を張って石油元売会社との取引を実現

関西化学研究所は、一九七二（昭和四十七）年には関西化研工業株式会社として法人化するとともに、一九七八（昭和五十三）年には米国航空宇宙局（NASA）に関係しているメーカーとの技術提携により「NASAシリーズ」の製造販売を開始した。「NASAシリーズ」は、高温や高回転など過酷な条件に耐える航空機用ジェットエンジンオイルなどを自動車用に改良したエンジンオイルの添加剤などである。

こうした積極的なアライアンスを契機に関西化研工業は着実に事業を拡大していった。しかし、その陰には精亮氏の並々ならぬ努力があった。いくら自動車関連製品を製造販売するといっても、お客様であるドライバーに販売するチャネルが必要で、そのほとんどは石油元売会社

profile

重永つゆ子 しげなが つゆこ

1948年広島県東広島市生まれ。高校を卒業後、広島市内の会社に就職。関西化学研究所（現関西化研工業株式会社）社長の重永精亮氏と結婚後、化粧品会社の所長を経て、89年に関西化研工業に入社。専務を経て、97年に社長に就任。関西化研工業は、資本金は2,000万円、従業員数は25名、売上高は5億円である。

文：城市 創（島根県益田市出身） 写真：村上征雄（山口県防府市在住）



瀬戸内海の近くに立地している本社

などが経営しているガソリンスタンドであった。そこで精亮氏は頻繁に石油元売会社のガソリンスタンド担当事業部に向いて信頼関係を強めていった。

「ほとんど東京に出張でした。そして、毎晩のようにお酒のお付き合いもありました。本当に体を張り、命がけで頑張ったと思います。だからこそ、地方の小さな会社でありながら、プライベートブランド商品を製造させていただくまでになったのです。」

プライベートブランドとは関西化工工業で開発製造した製品を石油元売会社の製品として販売するもので、そのためには製品だけでなく会社そのものへの高い信頼が不可欠である。

点で新しい事業を模索することが重要だと考えたのだ。

「どうしても、これといったヒントがあるわけでもないし、仕事で付き合いのある人はほとんど自動車関連の人たちで、そんなことを相談できる雰囲気ではなかった。そんな時に偶然手にしたのが「感性を磨く十力茶」という紙切れだった。

「そこに、異業種の人との交流を大切にしようという一文があったのです。その言葉に励まされて、私はいろいろな分野の人と接するようになりました。」

「こうした異業種交流から生まれたのが微生物の力で浴室などのカビを駆除する「バイオバク」だ。これはある会社の社長が



事業の多角化とともに商品も着実に増えている。

### 社員を束ねる「要」が必要だ

まさに第一線で会社をけん引してきた精亮氏を突然病魔が襲ったのは一九九三（平成五）年の冬だった。精亮氏は懸命にリハビリに励んだ。もちろん妻の重永社長も病院に寝泊まりするなど、看病に努めた。そのかきもあつて、もう少しで復帰できるまでに回復した。

「春には復帰できると喜んでいたら時で突然再発し、そのまま寝たきりの生活を余儀なくされました。最初の病気の後も意識や記憶ははつきりしていましたから、回復した後の経営のことも考えていたのだと思います。だから、本当に悔しかったです。」

その精亮氏の後を継いで、重永社長は社長に就任した。一九九七（平成九）年のことだ。重永社長は、結婚後は家事や育児に追われていたが、少しでも社会復帰したく、子どもたちが学校に通う頃から化粧品会社に勤めていた。

重永社長は化粧品会社に勤めながら、人材育成や販売ノウハウなど多くのことを学んだ。それとともに、会社の業績も大きく向上させていた。

「ここで学んだのは、いかに楽しく働き、どう業績に反映させるかということでした。そのことは社長に就任してからも大きく生きてきましたね。」

特許を取得したものであるが、それを知った時、重永社長はすぐに商品化を決定した。毎日家事を続けている主婦にとつて、この商品は画期的なものだったのだ。

「ものづくりが一番大切なのはお客様のニーズにあった製品を開発することです。その点でメタリ製品の製品だと判断したのです。」

重永社長は、生活事業部を新設し、自らバイオバクを手販路の拡大に取り組んでいった。すでに付き合いのあるガソリンスタンドなどでも販売してもらったが、ドラッグストアなどの新しい販路も拡大しようと考えたからだ。その結果、既存のカビとり商品に比べて高額であるにもかかわらず、バイオバクは着実に売り上げを伸ばしている。

また、レンジで温め、そのまま使える「安全こたつ」も開発している。これは表面は熱くならず温かさを十時間以上キープする特殊な蓄熱素材を使ったもので、電子レンジに入れて十分間加熱するだけで使えるのだ。低温やけどの心配もなく、電気代も少なく済むため、女性を中心に人気が高まっている。

### 同じ志を持つ従業員と楽しく働く

関西化工工業は日本のモーターリゼーションとともに成長を続けてきた。しかし、モーターリゼーションも大きな変革の時

重永社長の言葉によれば、「化粧品会社での仕事が絶対調」の時期に、精亮氏から経営に参加してくれと頼まれた。業績は順調に伸びていたが、それに伴って精亮氏が本社にいる時間が少なくなり、社員を束ねる「要」が必要だと考えたのだ。その適任となる人物が重永社長だった。精亮氏の言葉を受けた重永社長は夫を支援することを決意した。

### 関西化工工業に勤めて良かった

こうして一九八九（平成元）年に重永社長は専務として入社した。しかし、詳しい業務内容はほとんど分からなかった。だから、最初は「何もセム」と自嘲しながら、勉強を重ねていった。そして、経理担当としてコスト削減に取り組んでいった。会社は順調に成長しているが、その時期だからこそコスト削減で筋肉質の会社にする必要があると考えたのだ。交際費の見直しなどのコスト削減は第一線の営業担当者にとっては「苦言」である。しかし、その苦言をあえて口にする役割を重永社長は担ったのである。

「だから、営業担当者からは『カット専務』と疎んじられましたね。」

重永社長は笑いながら語った。その一方で、従業員の意欲を高めるた

代を迎えようとしている。自動車の動力源が、ガソリンから電気や水素に代わる時代が近づいているのだ。その一方で、原油高によるガソリンの販売不振や、ガソリンスタンドのセルフ化による自動車関連製品の販売伸び悩みといった課題も浮上している。

そうした変革の時代を迎えるなかで、重永社長は三つの事業を柱に経営していくと考えている。まず一つは創業以来の自動車関連製品であり、二つめは新しい柱として成長している生活事業製品である。

そして、三つめの柱は環境事業で、その基本コンセプトは再利用だ。例えば、自動車用冷却水の「クーラント」にしても、主成分であるエチレングリコールは劣化しないのに、クーラントが劣化すると新品と交換している。そこで開発したのが、劣化したクーラントの中の不純物を特殊フィルターで除去し、特殊添加剤を注入することで再生・再利用を可能とする「クーラントリサイクラー」である。「こうした機械を開発することで、何よりも貴重な資源を大切にできますし、ガソリンスタンドにとつても新しい収益を得るビジネスにできます。」

重永社長は製品のカタロギを手力強く語った。こうした関西化工工業の開発姿勢には多くの石油元売会社も賛同しているという。

めに目標達成時のボーナスをアップさせた。それまでの目標は非常に高く、ほとんどの従業員は最初から達成をあきらめていた。それを従業員と話し合っ実現可能な目標に変えるとともに、達成するとボーナスを増額することにしたのだ。

その決断には重永社長のある思いがあった。それは家族への感謝の気持ちだ。「営業担当者は月曜日から金曜日までほとんど出張です。その間、奥さんは家庭を守らねばなりませんし、寂しい思いもします。そんな奥さんや家族の人たちに『関西化工工業に勤めて良かった』と思っただきたいと考えたのです。」

頑張ればボーナスアップの夢が実現し、妻や家族からも喜ばれる。そうした仕組みをつくることで、重永社長は社員の就労意欲を高めていった。その結果、会社全体の業績は急激に向上するとともに、退職する人もほとんどいなくなった。

### 異業種交流で新規事業を開拓

精亮氏の後を継いで会社のかじ取りを任された重永社長がまず考えたのは事業の多角化であった。これまではオイル添加物などの自動車関連製品の製造販売で業績を伸ばしてきた。その市場はまだまだ成長が期待されるが、将来的には飽和することも予想され、今の時

女性従業員がときばきと電話に対応する事務室の壁には八カキで埋め尽くされたようなポスターが貼られていた。それは、関西化工工業の製品を利用したドライバーからのアンケート八カキだ。「自分で切手を貼って投函してくれた八カキです。このポスターは、これほど利用者にも満足してもらっていることをアピールするものであるとともに、自分たちの誇りや自信、さらには利用者を裏切らない責任感を醸成するためのポスターでもあります。」

女性従業員と一緒に写真撮影をお願いすると、女性従業員たちはさうと重永社長を囲むように輪をつくった。輪の中の重永社長の表情は、同じ志を持つ従業員と楽しく働ける喜びに満ちているようだ。



重永社長を囲む女性従業員たち。職場にはいつも元気な声があふれている。

# 地域資源と独自の染色体工学技術等で生活習慣病の予防を促進

〈鳥取県〉



豊かな水産物が水揚げされる境港（写真：フォトオリジナル）

豊かな水産資源と独自の  
バイオ技術に恵まれた米子・境港エリアでは  
産学官連携で生活習慣病の  
予防につながる評価システムの開発が進んでいる。

## 生活習慣病予防で注目される機能性食品素材

メタボリックシンドローム（内臓脂肪型肥満）という言葉が一般的に使われるように、肥満症や高血圧症、高脂血症といった生活習慣病への関心が急激に高まっている。それとともに、ドラッグストアなどの商品棚には生活習慣病の予防効果をアピールする機能性食品などが数多く並び、消費者が細かく「効能」などをチェックする光景が日常的に見受けられる。

機能性食品とは一般的に、健康の維持や健康の回復に好ましい効果を及ぼす働きが解明され、その機能を十分に発揮できるように設計・加工された食品をいう。しかし、機能性食品をより普及させ国民の健康の維持と回復に大きな成果をもたらすためには、「効能がある」だけでなく、「効能を科学的に解明し測定する」評価システムが必要だ。

そうした観点から鳥取県米子市と境

したグループがヒト人工染色体ベクターの構築と、ヒト人工染色体導入マウス（発光酵素複合遺伝子）での機能性成分評価システムの開発を進めている。

ヒト人工染色体ベクターとは病気の治療に役立つ遺伝子を細胞内に運ぶもので、押村教授はすでに開発に成功しており、治療用遺伝子を組み入れた細胞を移植することで病気を治療できる遺伝子治療への活用も現実味を帯びてきた。一方、ヒト人工染色体導入マウスでの機能性成分評価システムは、マウス内部の蛍光を撮影するシステムで、正常な肝臓は光り、そうでないものは光らないといった効果があり、注目を集めている。

## 動物などでの機能性の評価と食品素材の開発

臨床による機能性評価法の開発では、生活習慣病と類似した疾病を持つ動物に水産資源から得た生理活性物質を口から投与し、関節症や高血圧、腫瘍などに効能があるかどうかを評価している。また、生活習慣病患者に生理活性物質を投与し、血液・尿のサンプル測定を行って臨床評価する機能性食品も開発している。さらに、水産成分の新しい成果を評価するため等にも、ホムモニタリングシステムの開発にも取り組んでいる。

港市を中心としたエリアでは、産学官が連携して、生活習慣病予防に実効ある機能性食品素材の評価システムの構築と食品開発に取り組んでいる。

## 地域の個性と大学の「知恵」をマッチング

米子・境港エリアは、全国有数の漁獲量を誇る境港に代表されるように豊かな水産資源に恵まれるとともに、水産物から採れるキチン・キトサンやコラーゲン、フコイタンなどの利用に関する独自の技術がある。その中には、モスクのぬめり成分であるフコイタンを含有した抗がん剤副作用抑制剤を開発し、特許を取得した食品企業もある。国内の食品中小企業で薬剤の副作用抑制剤に関する特許を取得したのは初めてであるという。

さらに、鳥取大学が有する医学、獣医学、工学の研究シーズ、中でも米子市の鳥取大学生命機能研究支援センターを中心に染色体工学技術の開発が進められており、この分野では日本の代表的な研究開発拠点ともなっている。

こうした地域の独自技術やポテンシャルをフルに生かしながら取り組んでいるのが、「染色体工学技術等による生活習慣病の予防につながることを目指している」。

こうした取り組みによって、機能性評価システムや機能性食品素材などを中心とした新産業を創出して地域経済の活性化を図るとともに、生活習慣病を予防することで健康増進を図ろうとしている。

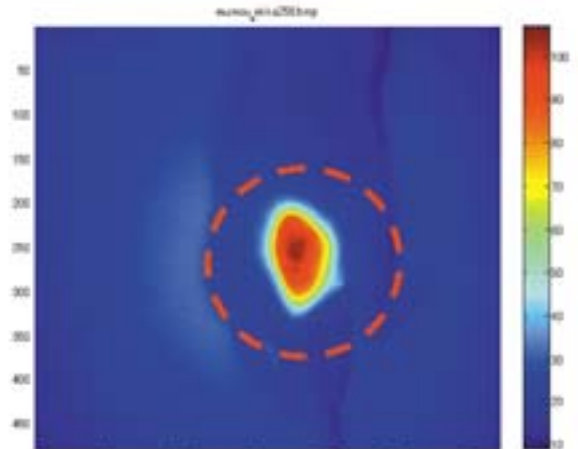
## 高まる地域の理解と着実に生まれる成果

「事業を効率的に進めるために、推進会議を開催して計画の策定や進捗管理等を行うとともに、地元や他地域との交流を進めるため、シンポジウムや市民公開講座なども開催し、さらには企業同士のマッチングを図るために研究交流会も開催し、市民の理解と関心を高めています」と、金谷さん。その努力は着実に身を結びつつある。

生活習慣病予防が国民の健康だけでなく医療経済においても大きな課題となっているなか、米子・境港エリアで展開されている産学官連携事業は、地域性を活かした事業として大きな成果を生み出そうとしている。



カニの形のままになっているキトサン（写真提供：甲陽ケミカル株式会社）



ヒト人工染色体導入マウスでの機能性成分評価システムで撮影したマウス内部の蛍光（写真提供：鳥取大学押村光雄教授）

こう語るのは、事業全体を管理している財団法人鳥取県産業振興機構の金谷邦男さんである。金谷さんはこの事業の地域科学技術コーディネーターでもある。

## ヒト人工染色体で投与物質の効能を評価

事業は、ヒト人工染色体を利用した機能性評価技術の開発、動物・ヒト臨床による機能性評価法の開発、水産資源からの機能性食品素材・食品の開発という三つの研究で構成されている。ヒト人工染色体を利用した機能性評価技術の開発では、ヒト人工染色体工学の権威である鳥取大学生命機能研究支援センターの押村光雄教授を中心と

「この事業には、県内外の十一企業と二大学、そして鳥取県などの行政機関が参画しており、研究者の数は百人を超えています。研究対象としているのは水産資源に含まれる機能性食品素材で、具体的にはカニから作られるキチン・キトサン、モスクに含まれるフコイタン、魚のつらつらから採れるコラーゲン、イカの皮からつくられるコンドロイチン硫酸などです」

# ステンレスの強さと輝きを追求するケミカル山本

〈広島市〉

ステンレスの溶接現場の環境改善を目標に創業したケミカル山本は、独自の特許技術で課題を解決するとともに、ステンレスの強さと輝きを求めて事業領域を拡大している。

## ステンレスの溶接作業を改善したい

ナイフやフォークといった食器やキッチンモノ、さらには化学・食品加工機械からステンレス車両など幅広い分野で使われるステンレスは現代生活には欠かせない金属である。その表面仕上げで独自の技術を開発し、全国の金属加工メーカーから高く評価されているのが広島市の株式会社ケミカル山本である。

ケミカル山本が創業したのは一九八二（昭和五十七）年である。創業者である山本正登社長は三菱重工株式会社広島研究所で化学と金属を専門とし、製鉄機械などの研究も続けてきた。山本社長は定年退職を迎えたとき、ある思いを抱いていた。それはステンレスの溶接作業現場の環境を何とか改善したいということだった。それを実現するためにケミカル山本を創業したのだ。

## 安全・無害にステンレスの焼けを取る

ステンレスは、鉄の最大の弱点である

「展示会などに出席すると、硝子酸に悩まされてきた焼け取りの担当者が率先して購入してくれます。そのうれしそうな表情を見ると、技術者冥利に尽きますね」と、山本社長はこやかに語った。中性電解焼け取り法は、その高い技術力が評価され、発明大賞や中小企業庁長官奨励賞、科学技術庁長官賞、さらには黄綬褒章受章の栄に輝いた。

## さびの防止を増強するスーパー不動態膜

中性電解焼け取り法によって溶接現場の環境を飛躍的に改善させたケミカル山本は、ステンレスを中心としながら事業領域を拡大していった。その一つが不動態処理だ。

ステンレスは鉄にクロムやニッケルなどを含有させた合金鋼である。それでもさびにくいのは、クロムが酸素と結合し、表面に不動態被膜という目には見えない非常に薄い膜を作り出すからだ。

「しかし、海辺で長時間使用したり、一部の薬剤に触れると、不動態被膜が取れてさびたり、ステンレス自体が腐食したりします」と、山本社長。さらに、特に海水や塩分を含む溶液中では、ピンホールを発生して大きな問題となる。

そこで開発したのが「スーパー不動態化膜」である。これは、含フッ素中性

さびに強いいため、日本では昭和五十年代頃から急速に普及するようになった。しかし、ステンレスの加工には大きな問題があった。ステンレスを溶接すると、溶接部が酸化して「焼け」ができ、放置しておくとも腐食の原因となるのだ。

焼けを取るためには硝酸とフッ化水素酸を混合させた「硝子酸」を塗り、表面を処理する方法しかなかった。しかし、硝子酸は劇毒物で、手に付くとやけどをしたり、爪の間から骨まで入ると夜も眠れぬ激痛を引き起こす。山本社長は、そんな現場の課題をなんとか解決しようと考えたのだ。

こうして開発したのが、電源器と、塩のような中性塩の電解液を使う「中性電解焼け取り法」である。まず、特殊な布をかぶせた金属製の電極をステンレスの表面にあてがう。次に電流を流しながらなぞるだけで、電解液が瞬時に酸と水酸化ナトリウムに分かれ、その酸が表面の焼けを取り、ピカピカにする。電流を止めると、再び酸と水酸化ナトリウムが結合し、元の安全な電解液に戻る仕組みだ。

## ステンレスの材種を瞬時に判別する

電解液処理によって新たなフッ素系不動態被膜と従来の酸素系不動態被膜を複合させることにより、海水などにつけてもステンレスの表面に孔が生じないようにしたものである。しかも、被膜はステンレスの表面だけでなく内部にまで浸透、拡散し、被膜の強度を増強させている。

さらに、ステンレスに含まれるマンガンの含有量を非破壊的に判別する「YM式マンガネッチェッカー」も開発している。ステンレスにはクロムやニッケルの含有量が一定以上必要であるが、ニッケルが希少金属で高価なため、安価なマンガンを含有させた「省ニッケルクロム系ステンレス」が増加している。その一方で、ステンレスはほとんど再生利用されるため、「省ニッケルクロム系ステンレス」のスクラップが混合したために再生品が規格外になってしまつことが懸念されている。

そこで開発したのがYM式マンガネッチェッカーで、ステンレスの表面で専用の電解液と電解紙と電池で電気化学反応させ、発色する色の濃度でマンガンの有無や量を判別するものだ。こうしたチェッカーはマンガン以外にも対象を広げている。これは大手ステンレスメーカーとの共同開

発であるが、その技術の多くはケミカル山本が培ってきたノウハウと技術である。これ以外にも、ステンレス溶接時に発生するヒュームやスラグ中に潜む、発ガン性で有害な六価クロムの無害化処理剤など、新しい手法の開発や製品化にも先進的に取り組み、二十七年間事業を発展させてきた。

## 子どもたちに化学の不思議と面白さを

「こつした事業以外にも、子どもたちに化学の不思議や面白さを体験してもらうための『わくわくケミカルクラブ』も毎月一回開催し、子どもたちに好評です。これも今年で三年目となります」と、山本社長は言葉を続けた。

このクラブは社団法人発明協会広島県支部に提唱し主催してもらっているもので、資金は山本社長個人が全額出資している。ケミカル山本は共催者として会場を提供するとともに、研究員も派遣している。まさに、地域に密着した社会貢献だ。

ケミカル山本が掲げるモットーは、「ステンレスにより耐食性（じよき）と輝きを」。である。そこからは、溶接現場の環境改善を目指した創業理念をしっかりと堅持しながら、ステンレスの可能性をさらに高めたいという志が伝わってくる。



電解方式による焼け取り作業  
(写真提供：ケミカル山本)



スーパー不動態膜の有無による耐食性の違い  
(右がケミカル山本のスーパー不動態膜を使用したもの)(写真提供：ケミカル山本)

表彰状などに囲まれた山本社長。  
その数の多さが長年の実績を示している。▶



# 障がい者施設と協働で バイオディーゼル燃料事業に 取り組むエコパートナーとっとり

《鳥取県米子市》

家庭などで使用された廃食油（廃テンブラ油）は軽油の代替燃料として利用できることから、廃食油を回収してバイオディーゼル燃料に有効利用する取り組みが全国的に広がっている。通常であればゴミとして処分される廃食油をバイオエネルギーとして再生させることで、二酸化炭素（CO<sub>2</sub>）を多く排出する化石燃料の使用を抑制できることから、地球温暖化防止の一環として取り組む自治体やNPOなどが増加し続けているのだ。

その一方で、「地球環境を守りたい」という熱いボランティア精神だけが先行し、資金や事業ノウハウ、技術、人材などが不足しているために、残念ながら志半ばで挫折するケースも多い。そうしたなかで、障がい者施設と協働することで継続的にバイオディーゼル燃料事業を展開しているのが鳥取県米子市のNPO法人「エコパートナーとっとり」である。

エコパートナーととりが設立されたのは2004（平成16）年で、当初は任意団体として省エネや地球温暖化防止の取り組みを地域に広げていった。「その当時から明確に打ち出していたのは、企業と行政、大学、住民が一緒になって環境問題に取り組んでいこうということでした。継続的に環境問題に取り組むためには、住民一人ひとりのボランティア精神だけでなく、企業が培ってきたビジネスという観点が不可欠であると考えたからです」と、エコパートナーととりの大野木昭夫理事長は『産官学民』のパートナーシップの必要性を説明してくれた。

地域での活動を展開するなかで、2006（平成18）年には地域の資源を利用した循環モデルの構築に取り組むようになった。これは、隣接する中海のヘドロを有効利用して菜の花を栽培し、そこで採油される菜種油を使用した廃食油を回収してバイオディーゼル燃料として有効活用し、大気や水質の汚染を防止することで中海を再生しようというものだ。

その一環として、障がい者施設との協働によるバイオディーゼル燃料事業がスタートした。これは、障がい者施設とエコパートナーととりが共同で回収した廃食油を障がい者施設で精製し、エコパートナーととりが確保した利用先に障がい者施設が販売するものだ。これにより、障がい

者施設にとっては社会との関わりを深めるとともに自立と雇用促進の一助とすることができ、エコパートナーととりやバイオディーゼル燃料を利用する企業、団体などにとっては障がい者の自立支援や地域の環境改善といった社会貢献を実現できる。

「事業を進める上で常に心がけたのは事業の趣旨をきちんと理解してもらおうことです。事業への深い理解こそが着実に成果を生み出す源泉になったと思います」と、大野木理事長。エコパートナーととりは、今後はさらにプラントの設置施設を増やして活動を拡大する方向だ。こうした活動は全国的にも高く評価され、2007（平成19）年度には「地球温暖化防止活動環境大臣賞」を受賞している。



家庭や事業所などから回収する廃食油



障がい者施設で精製される廃食油

# 久米産業団地

《岡山県津山市》

高速道路網と直結した、県北地域の製造拠点



## 特徴

- 1. 利便性の高い交通アクセス**  
京阪神・山陰・四国・九州を結ぶ高速道路網と直結  
中国自動車道院庄I.C.から2km 米子自動車道久世I.C.から14km  
岡山空港から56km JR山陽新幹線岡山駅から94km
- 2. 充実したインフラ**  
工業用水:700m<sup>3</sup>/日(2009年4月からは1,400m<sup>3</sup>/日)  
上水道:970m<sup>3</sup>/日 排水処理:自社処理後、公共下水道へ排水
- 3. 手厚い優遇措置**  
新企業立地促進補助金  
土地に係る固定資産評価額の3%の奨励金  
家屋に係る固定資産評価額の9%の奨励金  
新物流施設誘致促進補助金  
土地に係る固定資産評価額の3%の奨励金  
家屋に係る固定資産評価額の4.5%の奨励金  
特定団地分譲促進補助金  
土地代の20%を補助  
大規模工場立地促進補助金  
設備補助金:限度額50億円  
土地補助金:限度額20億円



## お問い合わせ先

岡山県産業労働部企業立地・物流推進課 TEL (086) 226-7374 メールアドレス: kibusu@pref.okayama.lg.jp  
津山市経済文化部企業立地課 TEL (0868) 32-2083 メールアドレス: kigyos@city.tsuyama.okayama.jp

詳しくはホームページをご覧ください。 URL: <http://www.optic.or.jp/youchi>

# 思い出の時計をよみがえらせてくれる、 ベテラン時計職人松浦敬一さん

創業百五十年の老舗時計店「新光時計店」を営む松浦敬一さんの元には、動かなくなつた思い出の時計をなんとかもつ二度使えるようにしてほしいとの依頼が国内外からひっきりなしに舞い込む。そうした人々の願いをかなえるために、松浦さんは今日も窓際の机に座り、一心不乱に時計の修理を行う。



profile

**松浦敬一** まつうら・けいいち

1944年広島県豊町（現呉市）生まれ。5歳の時から家業である時計店の仕入れなどを手伝い、現在は新光時計店の四代目として時計の修理などを行っている。世界で最も古い時計製造会社をスイスで創業したフランソワ・コンスタンタンの「可能ならばより最善を求めよ。そしてそれは常に可能である」という言葉を座右の銘としている。

文：藤沢享乃（広島市在住） 写真：折田茂樹（広島市在住）

## 風待ち・潮待ちの港町、御手洗

広島県呉市豊町の御手洗は、瀬戸内海のほぼ中央に位置する大崎下島にある江戸時代の中継貿易港である。当時は、蒸気船ではなかつたために風や潮の影響を受けやすく、航行に有利な風向きや潮の流れになるまで途中の港町で停泊するのが常だった。

そんな風待ち・潮待ちの港町として栄えたのが御手洗である。停泊中の船の水夫を接待するための待合茶屋が立ち並ぶほどの繁栄を誇ったが、昭和初期以降、次第にその役目を終えていった。現在、御手洗は江戸後期から昭和初期の街並みが数多く残る町として、国指定の重要伝統的建造物群保存地区に指定されている。

歴史の香りが色濃く残る町の一角にあるのが、一八五八（安政五）年創業の新光時計店である。百五十年続く、日本でも最も古い時計店として、しばしば「三ツ子」でも紹介されている老舗である。

特に四代目店主の松浦敬一さん（84歳）は数少ないベテランの時計職人として有名で、松浦さんの元には、日本国内はもとより海外在住の日本人からも修理の依頼が殺到しており、納品までに半年から一年かかることもあるほどだ。

## 五歳からの後継者教育

松浦さんは、ある意味、生まれながらの時計職人であり、時計店経営者であるといえるかもしれない。五歳の時から「二代目店主（松浦さんの祖父）」に「時計」に関する知識や技術を徹底的に叩き込まれた。当時の仕入れは船で大阪の問屋へ直接買い付けに行くものだったが、この時、二代目は松浦さんをよく同行させた。また、メーカーが行う展示会があると、小学校を休ませて松浦さんを連れ歩いたという。

「一番印象深かったのは、大阪の問屋の社長さんに言われた言葉です。社長さんによると、『三大良し』を備えている者が『近江商人』と呼ばれるのだとつて、それが『売り良し』『買い良し』『世間良し』ということになります。特に世間良しとは、世間から認められる人であることをいいます。本物の商人というのは、売ったり買ったりしてもうけることができるだけでなく、世間から頼りにされる存在でなくてはならない」といふことだ。

松浦さんが、経営哲学ともいえるこの言葉を教えられたのは五歳の時だった。「三ツ子の魂百まで」のことわざではないが、五つの時に教えられたこの言葉を忘れたことはないといふ。

また、職人としての手ほどきも幼い頃から受けた。時計はこの頃、非常に高価なものだったため、一年に何個も売れるものではなかつた。そのため、時計店の主な収入源は、時計の修理にあつた。新光時計店にも、時計の修理技術を学ぶために修行に来ている若者が数名いたが、彼らに混じって、松浦さんも時計を分解したり、組み立てたりといった作業を見よう見まねでやっていた。もともと手先が器用な松浦さんは、修行している若者たちよりもはるかに覚えがよかったそうだった。

## 時計職人にマニュアルはない

時計の修理は非常に細かな部品を扱う仕事である。そのため、時計職人には手先が器用なことはもちろん几帳面であること、「ソツソツと長時間集中力を保てる必要がある。しかし、本当に大事なはその人のセンスなのだ。そうだ。

「基本的技術はそれなりに身につきますが、そこから先の領域は、ひらめきだったり、その人なりの工夫だったり、なんとかして直してやろうとする粘り強さだったりします。だから、職人として一人前になれるかどうかは、その人自身にかかっているのです。」

時計の修理の場合、時計の構造が製

造年やメーカー、時計の種類によつて微妙に異なる。加えて、傷み具合によつても修理方法が違ってくる。さらに一般の職人の場合、メーカーの修理部門とは違い、必要な部品が必ず手元に揃っているとは限らないという悪条件になる。どのような部品なら代用できるか、あるいはなんとか必要な部品をこちらでつくることはできないか、そんなことまでも考えなくてはならない。このように、時計の修理は実にやっかいな仕事で、当然ながらマニュアルはない。一つひとつの時計の状態とじっくりと向きあい、最善の方法を創造しなければならぬのである。

## 世界に一つの思い出の品を大切にしたい

クォーツ時計の時代が到来してから、時計は消耗品になつた感がある。万一壊れたら、買い替える。そんな風に考える人も多い。

しかし、昔ながらのネジ巻き時計に愛着を持つ人もいる。松浦さんに修理を依頼する人にとつて、その時計はかけがえのないものであり、大事な思い出の品なのだ。だから、なんとかもつ一度、息を吹き返して、カチツカチツと時を刻んでほしいと願うのである。そうした強い思いがあるせいか、松浦

さんに修理を依頼する人は、遠方からわざわざお越しいたいたり、手紙や写真を添えていねいに依頼してくる人ばかりだといふ。

ある人は、新婚当初に買った目覚まし時計の修理依頼のために県外から訪ねてきた。その時計は、夫や子どもたちを毎朝起こすために使っていたもので、家族の歴史そのものに思えてならないので直してほしいと依頼にきたのである。

またある人は、自分が成人した時に親からもらった口レックスの時計が動かなくなりましたが、それを修理してほしいとせつせつと手紙で訴えてきた。しかも、手紙は一通だけでなく、彼女の三人の小さな子どもたちからの「ママの時計を直してください」という手紙が同封されていた。

「このような手紙を読むと、みんなの思いが心に響いて、なんとかして直してあげたいという気持ちになるのです」と、松浦さんは言う。大切な思いをお客さんから受け取るから、こらい仕事にも精が出る。

「もう修理は無理かもしれない」と感じて、何か名案はないかと必死に頭をひねる。松浦さんの目には、壊れた時計はモノではなく、依頼人の願いとして映っているのだ。

松浦さんの手に渡された時計は、壊

れた箇所を直してもらっただけでなく、部品一つひとつがピカピカに磨かれ、油もさしてもらい、正確な時間に合わせてもらった後も一週間ほどかけて丁寧に微調整してもらった。そうして「これで完璧！」とお墨付きが出たところで持ち主の元へ戻される。

この時、松浦さんは、必ず依頼人に手紙をしたためる。図解入りのわかりやすい修理の経過報告だけでなく、時計の手入れ法まで詳しく書くこともある。「今の若い人だと、ねじの巻き方を知らない人もいるからね」と、松浦さん。家族から譲り受けたものの、どのように扱えばよいかわからない人が意外と多いのだ。

「こんな風に、ひとつの時計を修理するにも、お客さんの手紙を読んだり、返事を書いたりといったことまでしてしまうので、なかなか数をこなせず、お預かりしたものの半年も経ってしまったりということがよくあるんですよ」と、松浦さんは苦笑いする。



一心不乱に修理に励む松浦さん

しかし、そんな職人気質と大切な思いを察してくれる人だからこそ「ぜひこの人に大事な時計を修理してもらいたい」という人が後を絶たないのだろう。そして、そんな松浦さんの誠意を感じるから、納品後には必ずといっていいほど礼状が届くのだ。

### 必要とされるなら距離は関係なし

松浦さんは、ずっと大崎下島に店を構え、作業もすべてここでやっている。「便利さ」がビジネスの大切な要素である時代に不安はなかったのだろうか。

「商売は、お客さまの気持ち次第です。たとえ私の店が東京の真中にあっても、気に入ってもらえなければ、お客さまは来てくれないものです。逆に、不便なところでも、『ぜひ頼みたい』と思えばどんな手段を使っても、依頼してくれるものです。最近では、ホームページで調べて電話で依頼し、宅配便で時計を送ってくるという便利な方法もあります。

また、マスコミによく紹介されているせいか、テレビや雑誌を見て依頼してくる方も多くなりました。本当に時計を直したいと思っていられる方には、距離はまったく関係ないのです。」

また、窓から差し込む自然光や騒音のない静かな島の環境は、修理に集中

するのに最適だといふ。ベテランになっても、小さくて繊細な部品の修理が終わると、精も根も尽き果ててしまう。そんな疲れたからだを優しく癒やし、明日の仕事への活力を取り戻せるのは、自然豊かな美しい島に暮らしているからかもしれない。



御手洗に残る昔ながらの町並み



細かな道具が並ぶ作業机

### 藤沢享乃 ふじさわ・ゆきの

鹿児島県生まれ。フリーライター。大学卒業後、出版社勤務を経て、広島県でフリーライターに。企業PR誌など、地元根ざした取材記事を執筆している。

佳味彩々

9

# 鯖の味噌漬け

《岡山市》

青みがかった銀色の細長い胴体に青褐色の斑点。成長すると体長一メートルを超える。鋭い外観には似合わず、口に入れるとけてしまいうような身の柔らかさと濃厚なうまみ特徴的である。一見白身の魚と間違えられることもあるが、実は赤身の魚だ。

北海道南部以南の日本沿岸に広く分布する鯖は、瀬戸内海では五月から六月が漁期となる。この季節、鯛や鯖が産卵のために群れをなして回遊する様子が島のように見えたことから、岡山では八十八夜から四十日間を「魚島どき」と言っていた。

「岡山人は日本一の鯖好きじゃないですか」と、岡山を代表する食文化としての鯖をPRしてきた岡山商工会議所の松田克義業務部長は力説する。

岡山中央卸売市場では、取扱量、取扱額とも鯖が常に上位にランクされる。

「ほかの地域では数字にさえのぼってこない」と、岡山人の鯖好きを裏付

ける。地元での漁獲量は減少したが、全国から高級鯖が集まるようになった。今では土佐のカツオ、鳥取の力ネなどのように地域を代表する魚になった。

岡山人と鯖のつきあいは、古く縄文時代にまでさかのぼり、江戸幕府の八代將軍徳川吉宗の時代に編さんされた、備前国・備中国の『領内産物帳』には「当地では、さわらなる魚が豊かである」と記されている。江戸時代から岡山の名産と認められていたこととなる。

岡山では、鯖はもともと刺身、たたき、そして郷土料理の「ばらすし」の具として親しまれてきた。さらに、県の代表的な料理として、今では味噌漬けも普及してきている。一挙に水揚げされ、しかも傷みやすいため、保存用に味噌漬けにするのが適しているからだ。

新鮮な鯖の味噌漬けは、締まった身に味噌の風味と香ばしさが加わり、味わいはしそ深くなる。大人の味だ。

文：山川隆之（岡山市在住） 写真：林田 悟（岡山市在住）



# 常栄寺雪舟庭

《山口市》

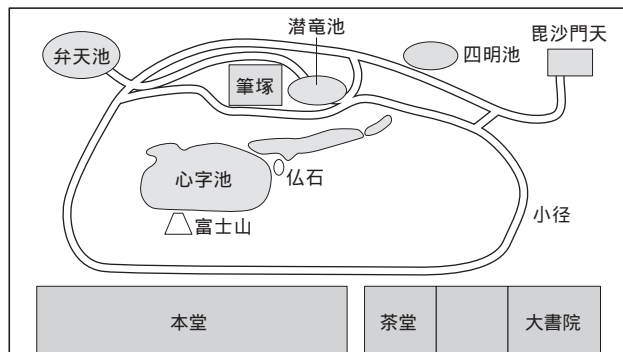
今から約五百年前、室町時代の守護大名である大内政弘が別荘として雪舟に依頼して築庭させたといわれる庭である。政弘は後、母の菩提を弔うために別荘を寺となし、妙喜寺と称した。さらに、毛利隆元の菩提寺になった際には常栄寺と改称されて、今に至っている。

で、室町時代の特色となっている立石が多く使用されている。東池畔には仏石と呼ばれる大石があり、西北側には、十六羅漢と名付けられた石組や坐禅石と呼ばれる石がある。本堂の前には中国の大陸を象徴したといわれ、中国大陸の「三山五嶽」になぞらえた石組がある。そして、中央には、日本を象徴した富嶽と称する石が置かれている。内庭は全面芝生で覆われ一木も用いられておらず、わずかに植え込まれたサツキやツツジが山林雲煙を表現しているといふ。

名付けられている。林の中には雪舟の筆塚もある。水と石とに主体を置いたこの庭園は雪舟の山水画のようだと評され、一九二六（大正十五）年には国の史跡名勝に指定された。本堂南面には、重森三玲師作の新石庭、南溟庭（一九六九年）がある。七五三の石組、杉苔をもつて海岸線を、白川砂をもつて大海を表している。本堂に上がると、雪舟画や寺宝が展示されているのを観ることが出来る。また、茶堂では「お抹茶セット」なども供される。ゆっくり静かな時間を楽しみたい。



心字池の手に立つ「富士山」(写真中央左)



配置図



力強い常栄寺の正門が中世を感じさせる。



本堂では心静かに庭を鑑賞する人の姿が絶えない。



心字池の奥から望む本堂



写真提供：呉市

## 工芸の旅 9

### 川尻筆

《広島県呉市》

江戸時代末期、農閑期の副業として始まった川尻筆は高級毛筆として全国に知られている。その特徴は、束ねた毛を水に浸し、薄く延ばしてから折りたたんで束ねる「練り混ぜ」という技法である。高度な技術が必要とするために大量生産には向かないが、多くの書道家に愛用され、国の伝統的工芸品にも指定されている。